

近い将来 世界をリードする 日本の文明文化の 拡がりとお行き③



(株) 人間と科学の研究所 所長

飛岡 健

(前号からの続き)

(6) 全ての物質消費をトーンダウンさせよ!

今日の地球社会の問題は、余りにも増え過ぎてしまった人口、そして更に100億人に向かって増えている人口と、ひとりひとりの物質消費が増えている事、そしてそれらの増加圧力が、人類の生存の棲家である地球の諸々の能力を超え始めている事がいちばんの原因と考える。人道的な考え方の下に、人口を抑制する事と、ひとりひとりの物質消費量を減らす事が、この地球上で人類がその生存を続ける為の大前提となるだろう。しかし、人類社会は相変わらず、人口を増加させ、1人当たりの消費量を増加させる方向で動いている。

確かに日本、中国、韓国等の地球の一部では、自然発生時に高齢化が進行し、人口減少に向かっているが、世界全体としては厳しい人口増加の勢いが強まっている。どのように人道に反せず、地球人口を減少させるか、その叡智が今求められているのである。

そしてひとりひとりの物質消費であるが、この地球上には、まだ基本的生存の為の物質が不足し、餓死や、寒さで死んでしまう人もいる。明らかにこの地球上の人類の間で、偏った形で物質の消費がなされている。もちろん、全ての人が全てに関して平等であるというのは悪平等になつてしまい、ある面で「働かざる物は、食うべからず」という考え方も必要であるし、努力によって富の蓄積を図る事も一定程度許されるべきものである。

しかし、ここで私が「全ての物質消費をトーンダウンさせよ!」と叫ぶのは、基本的生存の為に必要な物質を言っているのではなく、自分の欲求を過剰に満たす為に物質消費をしている人達に向けて叫んでいるのである。例えば娯楽の為に、世界中を家用機で飛び回ったり、豪華なヨットで海を航海している人々の事である。ここで少し趣を変えて、極めて質素に生きていた江戸時代の日本の姿を見てみよう。かなり物質には抑制されていた社会であった。先ずは日本の明治の開国の際に、活躍したハリスの有能な通訳であった

近い将来世界をリードする 日本の文明文化の拡がりとお行き

ヒュースケンが語った言葉を紹介しよう（『ヒュースケン日本日記』1857年12月7日より）

「今や私が、いとしさを覚え始めている国よ。この進歩は本当に進歩なのか。この文明は本当にお前の為の文明なのか。この国の人々の質樸な習俗と共に、その飾り気のなさを私は称讃する。この国土の豊かさを、至るところに満ちている子供達の嬉しい笑声を聞き、そしてどこにも悲惨なものを見出すことが出来なかった私は、おお、神よ、この幸福な情景が今や終わりを迎えようとしており、西洋の人々が、彼らの重大な悪徳を持ち込もうとしているように思われてならない」。

何と日本の姿を直感的に捉えている事であろうか！日本人の質素だが笑顔に満ちた社会があったのである。そこでヒュースケンの語っている西洋の人々の重大な悪徳とは何であろうか。それを次に考えてみよう。

（7）個人主義から間人主義へ 真の倫理とは

その西欧人の悪徳の1つは、一般

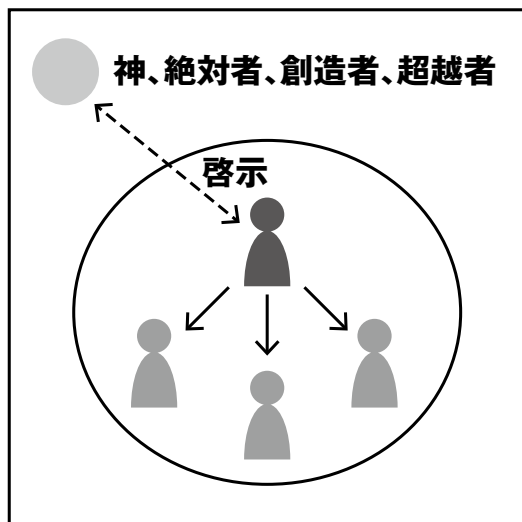
の人々はそう考えないが、私は西欧人の個人主義であると考えるのである。他方日本人は個人ではなく間人である。

今日、極めて個人の主体性と権利とが強く主張される時代となっているが、この個人の主体性という言葉に対し、何か近代社会においては望ましいものとして、いや都市社会の成立条件のようにすら考えていた。しかし、今日民主主義そのもののへの懸念が生じると、必ずしも主体性を持った個人を前提とする個人主義もまた、何となく再考すべき言葉になってきている。そこで個人に対して、間人としての主体性という言葉が浜口恵俊先生によって造語され、意味づけされた。

それは次のような内容である。個人という概念は、自らの主体性を神のような絶対者、創造者、超越者との関係でまず定立し、その確立された個同志が社会を社会契約論のように関係をしあうていく事になる。欧米社会の多くがそうである。

それに対し、間人というのは、日本の村社会のように運命共同体として、春の田植えも、秋の収穫も村人

Inside out (個人)



Outside in (間人)

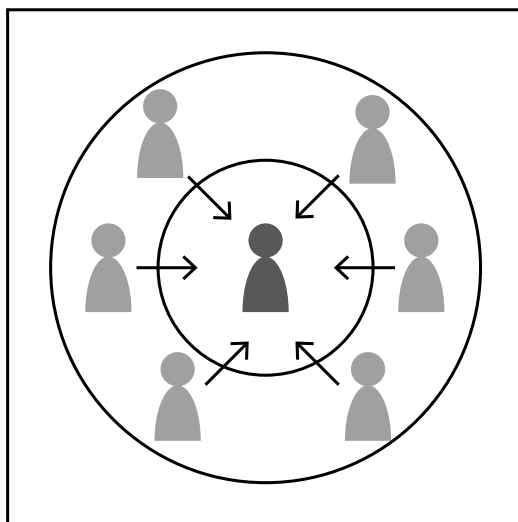


図9 個人主義と間人主義

全員で行って、生命の糧を得るような社会なので、そこでは1人の人は、他の人がどう考えているかを、まず捉えて、それらを加味して自分の立場や主体性を定立する。

従って間人は、そもそもそこに契約が存在しなくとも、自然と倫理が備わっており、暗黙の約束や契約が自然と出来上がっている社会組織になる。

今日の時代状況の中では、この間人主義こそ、個人主義に代わって求められているのではないだろうか？
しかし、今日地球社会の生存よりも、ひとりひとりの人権の方が「1人の生命は地球全体より重い」という言葉があるように重視され、結果として世界中に自己中の人間が増え、倫理観が弱まり、社会が不安定になってしまっている。

(8) 村社会の魅力

〜組織としての協力〜

前述の如く、間人が集まって形成する運命共同体としての村落は自然と協調性が宿っており、全体として活動する時の組織力は優れたものに

なる。

今日、その村はまさに宇宙村、地球村になってきているので、個人よりは、間人の方が望ましい人間の姿ではないかと私は考えるのである。

今日のグローバル리즘は、個人主義が主体となると、ますますその勢いを増していき、その動きを加速する方向に向かう傾向を宿しているが、仮に地球村として考えると全員自然

が危ういと感じれば、村全体として間人達が協力し合って何とかしようと努力する訳である。結果として村を救う事になる。まさに、日本人的社会構成原理の方が、これからの宇宙船地球号、あるいは「宇宙村」とっては望ましいのである。

他方、欧米に目を向けると、多くの都市が城塞都市(ブルク、グラート、フォート)として造られている。それはいかに蛮族からの襲撃から人々を守るかという視点から、都市の周りを強固な城塞で囲むように造られている。そこには「闘い」を常に配慮したものととして誕生している。

そして、それらの城塞都市の支配者は神であり、実際の支配者は神の

代理の教皇と「王権神授説」により、その権位を授けられた王なのであった。しかし、この教皇と王とは常に対立して、不安定にしていたのが欧州の歴史とも言えるのである。それに対し、日本の元々の村は自然の中に共存する形で造られていた。

(9) 継続は力なり

〜保守が伝統の良さ〜

日本という国は、圧倒的に保守が伝統であり、革新は余り強くない。それはいつの時代もそうであった。その為に、1つの時代が平安、安土、江戸の時代のように、何1000年も続いたのである。そして何よりも2000年以上続いている天皇制があり、また世界でいちばん古い株式会社もあるし、江戸時代に出来た会社が何1000も残っている訳である。

ある面で革新が盛んでないと時代に取り残されることになるが、この革新のエネルギーこそが曲者なのである。今日のように世界中が技術革新の競争をしている中で、遅れを取るという事は、その国や社会や組織

が脱落していく事を意味するので、人類の知の発明を地球社会の共有財産として、特定者にその権利を付与する事はしないように設計する事が望ましい。

少し社会という事に対し、競争するのではなく皆が自らの生存の場であると考え、その社会をいかに守っていくのか？という事に関心を高める事が必要である。そこでは何よりも「継続は力」であり、社会が永く続いていく事が前提となる。永く社会では諸々が時間的に洗練されていき、そこに深い文化と幸せな生活を生み出す事になるのである。

(10) 「もったいない」、

「有難ご」、「お陰様」の

考え方の敷衍

永く続いている日本社会の中で生まれた考え方を見よう。

日本人は「もったいない」、「有難い」、「お陰様」という言葉を多用する。それらの言葉を生み出す日本人の思考こそ、これからの世界が必要とする考え方である。それは自分を取り巻く全ての存在を等しく大切に

近い将来世界をリードする 日本の文明文化の拡がり と 奥行き

する考え方であり、同時に全てに存在価値があると考える考え方である。

まさにヘーゲルの「存在するものは合理的であり、合理的なものは存在する」の言葉を思い出してしまおう。

そうした言葉は、何となくきな臭い感じがすると考える人もいるかも知れないが、時間、空間、物質、エネルギーの全てを大切にすることが、これからの地球への負担を少なくし、人間同士がお互いに尊重し合うと共に、地球上の全ての存在を「お互い様」として有難がって、大切にすることを根本的考え方なのである。

と同時に人間がこの世に生きられている事自体を「有難い」と思う事が、この地球上での存在や出来事への感謝の気持ちを持つことに繋がるであろう。これは因果が逆でも、表裏一体であるので、どちらでも良いが、この「有難い」という感謝の気持ちを失ってきた事に、人間社会を危うくする要因が潜んでいるのである。

人類の歴史は、物質文明の厚みを増していく形で展開してきたが、人々が沢山の物質とその加工物を手にし、文明の産物を利用する度合い

が強まるにつれ、ひとつひとつの物質の存在に思いを馳せ、感謝の念を抱く事を失ってきている。確かに目の前に多くのモノがあればある程ひとつひとつのモノの希少性は失われ、しかもいつでも手に入るし、その有難みは薄くなる。

それこそ昔は、絹の靴下やストッキングは希少性を持ち、多くの人が憧れたが、今やナイロン製になり、そして使い捨てとなり、とても感動、感謝、感激する対象では無くなっていくのである。悉くそうした事が文明の厚みが増すにつれて生じている。

そして「お互い様」という互恵の念は、地球上で諸々が調和して生きていく上で、最も大切な念なのである。日本人は諸々を「悉皆仏」として捉え、お互いにその存在を不可分のものとすると共に、他の物に関わる時、それらに尊敬、畏敬や感謝の念を持つて接するのである。

これらは地球社会にとって、「お互い様」の互恵の念が必要不可欠なのである。

神から与えられたものに感謝するよりも、そもそも「そこに在る」全

てのモノに感謝の念を抱く事が望まれる。それこそが日本人の築いてきた「悉皆仏」の考え方であり、一念三千、即ち全てのモノが他の全てと絆を持っているとの考えを短く表現した言葉なのであり、まさに言葉としての価値が高いのである。

(11) 「道」への旅路

「静かに「仏」(悟ったもの) に向かう努力」

そうした1つの事柄への執着、こだわりを続け、どんどんと奥に入り込み、その過程で、自らを鍛え、悟りを得て、仏に近づくべく人格を陶冶していくのが、日本的な「〇〇道」の世界である。この考え方が、これからの地球社会を救う1つのカギである。我々の日々の生活は、豪華な生活をする為でなく、自らが悟りを拓く為の修練の場と考える。

その為にも、ひとりひとりが悟った仏になり得るとの確信が必要である。それには一神教ではダメであり、

「悉皆仏」の如く、この世の諸々は本来皆仏になり得る存在であり、それに向かう事が現世であり、浮世な

のだと考える日本社会の中に低在する教えが必要なのである。

日本人のように、日々を悟りへの道、仏の道と考え、日々の生活の中で、修業、修練、修道、修行をしていく事が、これからの地球社会に必要なのである。

日本の生け花は、花器の中に「天人」を再現する。このマクロコスモスとしての宇宙(天)を僅か数10センチのマイクロコスモスの花器の中に表現をする。その為に厳しい修業をして免許皆伝に向かう。そこには幹や枝で表現される「永遠」と葉や花で表現される「瞬間」とが交錯し、花器の無機の静盆と、植物の有機の躍動とが交響して、鑑賞者に優雅な中にも宇宙観、世界観、死生観、時間、空間を感じさせ、味わいを生み出す。

全ての「〇〇道」は生け花と同様に、その中に「仏への道」、「悟りの道」を内包しているのだ。

(12) 清貧の思想

「欲望の退却へ」

日本の歴史の中で、多くの時代が

一部の人を除いて、人々はそんなに物質的には豊かでは無かった。これは世界も同じである。そんな時代状況もあって、**「清貧」**という言葉が、昔は大手を振って罷り通っていた。

でも経済的に貧しいというだけでなく、そこにはもつと抜本的な意味があった。特に社会的に重要な立場にある人は、清く正しく、そして貧しくというのが、清貧の意味と考えられるのである。特に社会のリーダーや学者、研究者は一生を清貧で過ごす人が多かったし、お坊さんも、良寛様のように本当に必要な物以外は身に付けず、人々の為に一生をひたすら折りの為に生きていた。

何よりも、1つの事をずっと続けている人は、経済的に豊かになる努力をする時間が無いし、物質的希求の意志もあまり強くないので、余り経済的に豊かである事は少ない（もちろん結果として豊かになる事はあ

るし、凄く価値のある言葉であると思う。

ところが、今日の政治のリーダーも、学者、研究者も例外を除いて、

一定程度の身分が保証されていて、豊かではなくとも、貧しくはない。

かなりの多くの医者等は、本当に高級マンションに住み、高級車を乗り回している人が多く、それなりに努力

されたので、そうなったと思われ

るが、物質的には貧しくても、精神は一流というのが昔の政治家や学者

や研究者、あるいは専門家の矜持ではなかったのではと思うのだが、それが必ずしも良いとは言えないが、

今日のような皆が物質的な豊かさを求めてしまうと、グローバリズムの

ような状況が訪れる事になってしま

う。そうした状況を何とか健全化する

には、人類の物質的欲求を一定程度のレベルに抑える事が不可欠にな

る。今日のような1人の人間が一国を支配するような富を持つことな

ど、あってはならない事なのである。京都大学の名誉教授の佐伯啓思先

生が、つい最近『さらば欲望』という著書を出版され、資本主義の隘路をどう脱出するかを論じておられる

が、まさに「人類が富と自由の無限の拡張を求め続けた近代人の果てしない欲望」におさらばをしなければと主張されている。

しかしこの人間の物質的拡大欲求を抑える事は極めて困難な事である。どの国のリーダーもいかに自国民をもつと物質的に豊かにするかを

真剣に考える事が当たりまえであり、企業のトップも家庭の主人も、

我々ひとりひとりも、その経済状態をより良くしようと考え行動する。

それを人類は有史以来、いや歴史の無い時からそうやってきたのである。

それがある時に、ある段階で止める事は難しい。しかも地球の全人口の16〜20%は未だ栄養の足りてい

ない時に実行していくのは極めて難しいと思う。

だが、そうした物質的欲求の拡大をグローバリズムとして展開し続ける限り、人間の存在が地球のガンと

なり、この地球は人間の自由な活動を許してくれなくなる。ガンも末期

症状となり、自分の存在母体を喰いちぎって、自らも死んでいく事になるに違いない。

もう1度、**「清貧」**という言葉を良

く考えて欲しいものである。

そこで次に自然界の中に徐々に引き算をして、成長していく動物がいたので紹介しよう。

(13) 何を失って成長するか？

↳ 引き算型成長論

茶の聖人と語られる千利休は、茶室を最終的に1.5畳まで小さくしたが、その背後に控えている精神は究極の質素である。そこでは出来る限り素材を用いない、用いても出来る限りありのままの姿を残し、空間を設計しつつ、そこに気宇壮大なる精神の世界を閉じ込めようとした。

ある意味で、日本人の縮み志向の一環と言えるのであるが、これからはこうした精神の世界的質素さへの

希求と実際の物質的世界のミニマム化が全てにおいて必要であり、実行せねばならないのである。

こうした引き算型思考は、実は自然界にも例があり、その名は「アベ

コベガエル」である。生まれた時は25cm位のオタマジャクシで、成長して4分の1の5〜7cm程度に縮小

し、筋肉質の肉体になる。

近い将来世界をリードする 日本の文明文化の拡がりとお行き

今までの文明は常に加えるのみであり、その加えるという単純な足し算型文明として展開してきた。しかしこれからの時代は、こうしたアベコベガエルの引き算型の成長の考え方が、全世界に必要なになっている。何よりも人間の欲望の足し算を引き算にすることを考えねばならない。

世界的に豪華な城や宮殿を造るのにはある面で素晴らしい事であるが、今日の地球の有限性を感じざるを得ない状況では、いかにひとりひとりが余り物質消費をしないで、大自然と調和をして、ゆつたりしたリズムで生活していけるかを考えねばなら

韓国人の李御寧氏が印した「縮

(14) 日本人の縮み志向を 「人類の縮み志向」に

ない。その意味で多くの無駄なモノの断捨離をしなければならないと思う。

その為にも利休のように、より小さい空間での茶道をみならい、より軽薄短小の世界に、高次レベルの認識の世界を築いていく努力こそが必要不可欠である。引き算型思考を示す例としてアベコベガエルの実例は大いに参考になると思う。

「志向の日本人」はかなり売れた本であり、「日本人はマクロをミクロの世界に閉じ込めて表現したり、作ったり、考えたりすることを特色とする文化を有する民族である」という論を展開している。

確かに盆栽にしても、庭にしても、宇宙や世界をその中に取り込むものが多いし、狭い空間を有効に活用し、そこに沢山のモノを取り込むのも、前述の利休の茶室のように得意である。

これからの世界は様々な「縮み志向」が重要であろう。今までのように、より遠く・より広く・より速く・

(以下、次号へ続く)

より多く・より合理的に・より効果的にといった拡大指向から、より身近に・より小さく・より少なく・よりゆつたりとした思考が望まれている時代にならねばならない。ある面で、このゆつたり、そして軽薄短小へのアクセスは日本人が得意としたところであるが、これを世界的に広めていく事が大切であると共に不可欠である。

もう少し人類の活動をマクロからミクロの軽薄短小に縮めながら、前と同じような価値を持つように工夫せねばならない。特に生活空間や生活そのものを軽薄短小にする事が望まれるが、そこでの人々の満足感をどのようにデザインするかが望まれる。VRやメタバースを利用すると同時に、人々の欲求の方向を縮み志向にすることが大切であり、まさに「縮み志向の世界人」を演出していかなければならないのである。断捨離をすべきところは確実にして、この人類社会をもっと身軽にしなければならぬ。

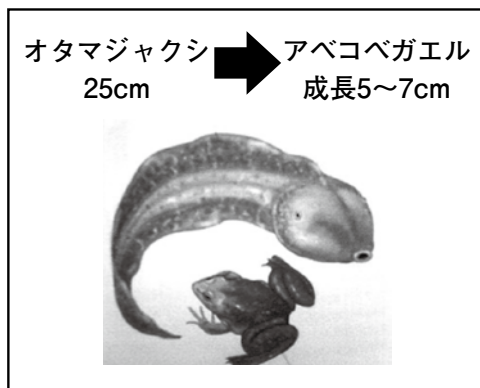
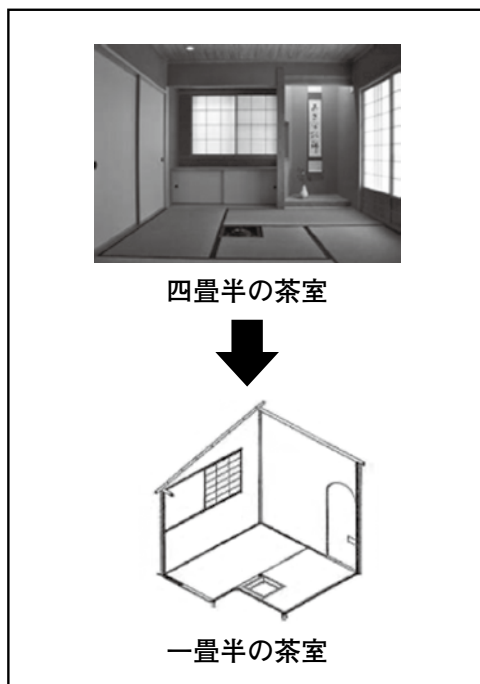


図10 引き算型思考